

(成果報告書)

「和菓子バル」イベントを通じた、大井川川越遺跡のPR手法の提案

静岡産業大学 経営学部 中山研究室

教 員：特任教授 中山勝

参加学生：岩崎教祐、児玉直大、松尾武師、芳賀正瑛、
松浦大希、大林颯太、服部凱人、法月天仁、
佐々木聖真、川真永、小笠原正仁、大江亮介、
小澤凜太郎、石田清流、近藤京佳、吉本真悠、
春田杏奈、中谷咲穂、新聞美月、伊藤信治、
長原颯也

1. 要約

和菓子バルイベントについては、イベントの企画段階から参画し、学生の企画による蓮台越し体験、クイズラリー、受付案内を実施することにより、イベントの新たな可能性を探り実践した。また、イベントの開催前に島田市内の和菓子店を訪問して、和菓子の販売方法やPR方法について検討し、イベントで実践した。

川越遺跡のPR方法については、日本遺産に登録をされ歴史資産を有効活用し観光PRで成功している由比宿（静岡市）、三島宿（三島市）の先進事例を調査し、単体の歴史資源のPRだけではなく、地域の人的資源、歴史資源、物産等の資源のコラボレーションとストーリーおよび回遊性による地域ブランドの形成が重要であることがわかった。

このため、島田市緑茶化計画を進める島田市においては、川越遺跡と和菓子だけでなく、お茶も加えたコラボレーション、加えてそこに川越遺跡と蓬莱橋、大井神社などを組み込んだストーリーならびに回遊性、実行をしていくための人・組織の形成が必要であるとの結論に達した。当面の取組としては、和菓子バルイベントを和菓子だけでなくお茶も加えたイベントとして企画すること、さらに、恒常的な取り組みに向けて、島田市内の歴史資源とお茶関係の体験施設、和菓子店を巡るクイズラリーなどを企画、継続的に運営・情報発信するための地域の体制づくりを提案した。

2. 研究の目的

本研究は、「和菓子バル」イベントを通じた大井川川越遺跡のPR手法を検討し、川越遺跡を観光資源として活用していくための方策を提言することを目的として研究を行った。

3. 研究の内容

(1) 和菓子バルイベントにおける学生企画のイベントの実施

令和6年11月3日に島田市が主催して開催された「和菓子バル」イベントについては、イベントの企画段階から参画し、学生の企画による蓮台越し体験、クイズラリーを実施することにより、イベントの新たな可能性を探り実践した。また、イベントの開催前に島田市内の和菓子店を訪問して、和菓子の販売方法やPR方法について検討し、イベント受付案内で実践した。

① 学生による蓮台越し体験の企画・実施

川越遺跡の歴史的な意味をイベントの来場者にPRするため、学生が島田市博物館とともに蓮台越し体験を企画し、イベント当日に実施した。

② クイズラリーの実施

来客が島田市博物館や川越遺跡を回遊するようにするため、学生がクイズラリーを島田市に提案し実施した。学生が川越遺跡に関するクイズの問題と答えを作成し、会場の各地にクイズポイントを設置し、クイズに答えた人は、大学の備品のガチャガチャ機を使って抽選ができる仕組みにした。景品は和菓子店等が提供する割引券等を配布した。

③ 島田市が行うアンケートの実施

クイズラリー合わせて島田市が行うアンケート調査も実施した。アンケートに回答いただくために、クイズラリーとは別に景品の抽選を行った。

④ 会場案内の実践

イベントの開催前に島市内の和菓子店を訪問して、和菓子の販売方法やPR方法について検討した。イベント当日は、学生が着物を着て、会場の設営、会場の受付案内所での会場の案内を行うとともに、和菓子販売についても説明案内を実践した。

[川越遺跡事前調査]



東海道と島田宿の資料調査



蓮台越しチームの川越遺跡の調査

[和菓子バルイベント①]



ガチャガチャによる景品配布



クイズポイントの設置

[和菓子バルイベント②]



会場案内（島田市長さんと）



蓮台越し体験の企画・実施

(2) 川越遺跡を観光資源としてPRするための方策の検討

川越遺跡を観光資源としてPRする方策について検討するため、川越遺跡の現地調査及び和菓子店等のヒアリングを行うとともに、日本遺産に登録をされ歴史資産を有効活用し観光PRで成功している由比宿（静岡市）、三島宿（三島市）の先進事例を調査した。

① 島田市博物館の職員の方々のヒアリングと意見交換

11月3日の和菓子バルイベントの開催までに学生と教員が班に分かれて川越遺跡を訪問し、島田市博物館の職員の方々のヒアリングを行うとともに、意見交換を行った。

② 大井川川越遺跡の調査

11月3日の和菓子バルイベントの開催までに学生が班に分かれて、川越遺跡に残る川会所、番屋などの建築物や展示の内容の調査を行った。また、着物レンタルの職員の方のヒアリング調査を行った。

③ 島田市内の和菓子店の訪問調査

和菓子バルイベントに参加する和菓子店のうち、市街地にある店舗を訪問し、和菓子の調査を行った。

④ 静岡市の先進事例の調査(12月26日)

島田市の国指定の川越遺跡を観光資源として活用してPRする方策を検討するため、静岡市において日本遺産登録された「日本初「旅ブーム」を起こした弥次さん喜多さん、駿州の旅～滑稽本と浮世絵が描く東海道旅のガイドブック（道中記）～」の地域である由比宿周辺（由比本陣跡の東海道廣重美術館のほか、由比宿の歴史、建物の保存・店舗）および特産品を使った土産物の調査を行った。



望岳亭と山岡鉄舟の説明



由比本陣跡の東海道廣重美術館の調査



由比本陣周辺の店舗（正雪紺屋）



桜エビ館の物産調査

⑤ 三島市の先進地事例の調査（1月11日）

同じく、島田市の国指定の川越遺跡を観光資源として活用してPRする方策を検討するため、日本遺産登録された「旅人たちの足跡残る悠久の石畳道一箱根八里で辿る遥かな江戸の旅路ー」の地域である三島宿周辺三島市では三島宿の中心である三嶋大社の調査の他、三嶋大社周辺商店街を視察した。特に日光陶器店の店主である関根氏に三島市観光客増加の理由や独自に開発した「三島風鈴」について歴史や地域資源との関連について詳細な説明をいただいた。また、新たな観光ルートに入った「三島スカイウォーク」を視察し、三嶋大社内の土産物との相違や観光ルートとしての一体性について調査した。



旧・懐古堂ムラカミ屋をリノベーションした、ウイスキー蒸留所（三嶋大社前）「Distillery Water Dragon」の見学



日光陶器店店主より、三嶋大社観光客を通過客にさせないための取り組みについて話を伺う（三嶋大社前）



三嶋大社とは異なる土産物を販売している三島スカイウォーク

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

本研究は、「和菓子バル」イベントを通じた、大井川川越遺跡のPR手法の提案を目的としている。このため、計画では、川越遺跡及び島田市内の現地調査、ヒアリングを行い、実際に和菓子バルイベントで学生がイベントを企画・実践するとともに、先進事例を調査し、イベントの新たな取組みの可能性やPR手法の改善策を検討し提案する計画であった。

(2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

B 計画した内容を一部修正して実施した。

理由 当初計画では先進視察先の1つを小山町地区（歴史施設の保存・リニューアル活用の事例）としていたが、島田市の課題解決により適切な事例として三島市（三島宿）が良いと判断し視察先を一部修正した。

(3) 実績・成果と課題

学生の企画による蓮台越し体験、クイズラリーを実施することにより、イベントの新たな可能性を探り実践した。また、イベントの開催前に島田市内の和菓子店を訪問して、和菓子のPR方法について検討し、現地での受付案内の際のPR、クイズラリーの内容に反映するなど、イベントで実践した。

静岡市、三島市の調査において、歴史資源を生かして観光誘客に成功するためには、現地で価値を創造し認知させる人材と、地域資源（静岡：桜エビ、三島：箱根西麓野菜）や伝統行事（三嶋大社のお田植行事をヒントにした福太郎餅）とのコラボレーションしたブランドづくりが成功の秘訣であることがわかった。さらに、観光施設が単体で情報発信するのではなく、地域のストーリーや、施設を有機的に繋げることによる回遊性を高めることが地域ブランドの形成・向上に役立つという結論に達した。

島田市には、宿場町や大井川川越遺跡の他、蓬莱橋、大井神社（帯祭り）、金谷坂などの歴史資源、お茶関係の体験型観光施設、和菓子店の集積といった地域資源が豊富にあるが、これらの地域資源のコラボレーションに加えストーリーをもって回遊する仕掛けが課題である。

(4) 今後の改善点や対策

和菓子バルイベントは、和菓子と川越遺跡のコラボレーションがされているが、島田市緑茶化計画という地域ブランドを生かしていくため、お茶も加えたイベントとしていくこと、さらに市内観光施設にも川越遺跡の情報発信が行われる仕組みを検討することがポイントとなる。

5. 地域への提言

和菓子バルイベントにおいて、お茶と和菓子、歴史資源のコラボレーションを社会実験として実践すること、及び恒常的な取り組みに向けて、島田市内の歴史資源とお茶関係の体験施設、和菓子店を巡るクイズラリーなどを企画・運営するための地域の体制づくりが必要である。

6. 地域からの評価

和菓子バルイベントにおいて学生が企画した蓮台越し体験、クイズラリーは、来場者に好評であった。また、和菓子の販売においても、来場者に大変、喜んでいただいた。本研究を進めるに当たり、島田市博物館の職員の方々、川越遺跡の周辺の方々、和菓子店の方々、お茶関係の体験型観光施設の方々とお話する中で、地域の資源のコラボレーションの必要性の認識を共有することができた。